

異世界に飛ばされた

Where is Oosan going in another world?

おっさんは
何処へ行く?

シガレット
Cigarette

7



目次

第③章

学校設立

197

第②章

家族の歩み

083

第①章

総本山壊滅

007

主な登場人物

トレス

一流の腕を持つ
針子職人。
とある事情で仕事が
できなくなっている。

ミカ

召喚されてきた
日本人一家の奥さん。
農業系のスキルに
適性がある。

夕夏

タクマの婚約者。
タクマと同じように
異世界に飛ばされて
きていた。

タクマの仲間達



ヴァイス



ゲール



アフダル



ネーロ



ジュード



ブラン



レウコン



ナビ



アルテ



ヴェルド

タクマ

異世界に飛ばされて
きたおっさん。
趣味を楽しみながら
異世界を旅する。



第1章

総本山壊滅



1 元凶の浄化

異世界に飛ばされてきた普通のおっさん、タクマ。日本にいた頃に付き合っていた恋人・夕夏と異世界で再会を果たした彼は、彼女と新たな生活を送る事を考えていた。

その一方で、彼には解決しておかねばならない大きな問題があった。

邪神の欠片である。

王都を瘴気で汚染していたそのアイテムは、タクマが消滅させたものの、まだ教会の総本山に存在しているという。

タクマは残りの邪神の欠片を消滅させるべく、彼の頼もしい守護獣たちと共にその地へ乗り込んでいくのだった。



タクマは、狼の守護獣であるヴァイスと鷹の守護獣のアフダルを引き連れ、教会の総本山に向かっていた。

総本山に近づくにつれて、見かける集落の規模が徐々に大きくなってくる。だが、生存者はすでに救出した四人以外に見つかる事はなかった。

そして総本山へ向かう道中で、最後の集落に着く。

タクマが今まで通りに結界を張って浄化して気配察知すると、多くの生存者がいるのが分かった。タクマは大きな声で生存者に語りかける。

「俺は冒険者だ！ 正気なら返事をしてくれ！」

呼びかけに応じて、隠れていた人々が地下から出てくる。その人数は二十人を超えた。

「あ、あんた、どうやってここに？ それに家がなくなってる」

住人たちは、タクマが瘴気が漂う中どうやって来たのか分からなかった。訝しげな表情をする彼らにタクマは言う。

「瘴気を浄化しながら来た。家がなくなってしまったのは、家自体が瘴気に深く侵されていたから浄化した時に一緒に消えてしまったんだ。俺はあんたたちに害を与えるつもりはない」

続けてタクマは、不安そうな住人たちにこれから救助する旨を伝え、クリアとヒールの魔法を施した。移動する際に、その方法を知られないようにするため眠ってもらうという条件は呑んでもらえた。

タクマが人々に魔法を掛けて眠らせようとした時、突然、ヴァイスが声を上げる。

「アウン！（父ちゃん！ 瘴気がー）」

タクマがヴァイスの示す方を見ると、瘴気が迫ってきていた。

タクマは落ち着いたまま、魔法の範囲を全員が入るように指定すると、結界の魔法を三重に張った。

すぐさま瘴気は結界にまとわりつき、生きている者を探すように蠢く。

タクマはこのままでは危険だと判断し、即座に全員を魔法で眠らせた。そして結界をその場に残り、鉱山都市トールン領主、コラル・イスルの邸宅へ人々ごと跳んだ。

タクマたちが急に現れたにもかかわらず、コラルの使用人たちは即座に事情を察してくれた。彼らは人々を屋敷へ運び込んでくれる。

駆けつけてきたコラルに、タクマは伝える。

「総本山近くで、逃げだす事もできずに孤立していた人たちを連れてきました。集落の浄化は済ませたのですが、総本山に近すぎるため瘴気に襲われました。なので、強制的に眠ってもらって跳んできたんです」

「総本山はそこまで汚されていたのか……」

コラルは顔を真っ青にしていた。

「ええ。これから戻って総本山自体の浄化をしてみますが、上手くいくかは分かりませんね。ですが、切り札があります。とにかくやってみますよ」

そう言ってタクマが天叢雲剣に触れると、コラルは心配そうに言う。

「そうか。だが、無理はするなよ。君には家族がいるのだから。最悪、逃げたとしても誰も責めん」

「そう言っていただけ、ありがとうございます。もし手に負えないようだったら逃げてしまってもいいかもしれませんが、できるだけだけの事はやってきます」

「分かった。避難してきた者たちは任せてくれ」

コラルと短い会話を交わしたタクマは、ヴァイスたちが待つ結界へ戻った。

結界の外はすでに真っ黒な瘴気に包まれていた。タクマが今まで見た事がないくらいに濃い瘴気である。

ヴァイスが心配そうに話しかけてくる。

「アウン？（父ちゃんどうするの？ 結界は保ってるけど、瘴気をどうにかしないと総本山に行けないんじゃない？）」

「いや、俺たちが総本山に入るだけなら問題はない。結界を自分たちに掛ければ、なんとかならかな。だけど、瘴気をどうにかしないといけないのは確かだ。この濃さだと前を見るのも大変そうだし」

タクマはそう答えて、ふと思いつく。彼はナビゲーションシステムのナビを呼び出した。

「ナビ。無理やりだが、ここから総本山全体を範囲指定して浄化しても大丈夫か？」
「そうですね。空が上がって瘴気の範囲よりも広く魔法を掛ければ問題ないと思います」
大胆な考えだったが、ナビによると大丈夫なようだ。

「……いけるか。天叢雲剣で結界の周囲を吹き飛ばしたら、空が上がって一帯を浄化してみよう。
だが、瘴気の大本をどうにかしないと根本的な解決にはならない。だから、俺が浄化し終えたら瘴
気の出所を探すのを頼めるか？」

タクマは浄化するだけで終わると思っていない。その大本を叩かなければ瘴気は復活し続けると
考えていた。

さつそくタクマは自分とヴァイスたちを浄化し、結界を付与した。

続いて、天叢雲剣が耐えられるギリギリまで魔力を流す。剣に十分に魔力が行き渡ったのを確認
すると、タクマは居合の姿勢で鞘から剣を振り抜き、光刃を水平に放つ。

光の刃が結界をすり抜け、瘴気を切り裂いていく。

辺りに瘴気がなくなったのを確認したタクマは、アFDルに指示して瘴気の届かない高度まで上
がらせた。アFDルに上空の安全を確保させると、続いてタクマとヴァイスも空へ上がる。瘴気は
タクマたちを追いかけてくる事はなかった。

タクマは上空から広がる瘴気を見ながら告げる。

「さあ、やってみるか。それにしても範囲が広いな。ナビ」

「はい。範囲指定のフォローをします」

タクマはナビの補助を受けつつ、結界の範囲を少しずつ広げていく。しばらくして、ナビがタク
マに声を掛ける。

「まだです……そう、そのまま広げて……はい！そこで発動を！」

ナビの合図に合わせて、タクマは強力な結界を放った。

その結界は、これまでにタクマが発動したものである中で最大規模となった。巨大な結界により、見
事に瘴気を抑え込む。

「成功です。瘴気はこれ以上広がる事はありません。マスターが結界内を浄化した後に、瘴気の出
所を検索します」

「了解だ。じゃあ、これまでで最大の魔力を使って浄化するぞ」

タクマは意識を集中し、結界内が清廉な空気で満たされるように想像し、さらに動物や植物が生
き生きと育つようなイメージをそこに加えてみた。

かなり複雑な事を想像したため、魔力が膨大に消費されていく。タクマの体からは金色のオーラ
が迸っていた。

結界の中心に金色に輝く球体が現れ、どんどん大きくなっていく。

タクマは手を前に出し、手のひらを上にして広げる。そして、金色の球体が大きくなるのを止め
た瞬間——一気に手を握った。



すると球体は破裂し、光が結界全体に広がる。それによって瘴気は消し去られ、汚された木々や建物は浄化されて消失していった。結界内すべてに光が行き渡るには、二十分ほど掛かった。

タクマが息ついていると、アフダルが異変を察知して報告してくる。「ピュイ！（あれをー）」

アフダルの示す方に目を向けると、総本山の中心から瘴気が噴き出しているのが分かった。どうやらあれが瘴気の出所らしい。

タクマはすぐに瘴気を範囲指定して結界を張って抑え込む。そうして結界が作用している事を確認すると、紙を二枚取り出して文字を書き、それに紐を括り付けた。

タクマは守護獣たちに声を掛ける。

「アフダル、ナビ、ヴァイス。俺は瘴気が噴き出している所へ行く。その間にこれを首に掛けて、生存者を探しておいてくれ」

タクマはそう言っ、アフダルとヴァイスの首に紙で作った札を掛けた。

そこにはこう書いてある。

この動物たちは従魔です。後についていって避難をお願いします。

ナビには、ヴァイスの背に乗ってフォローするように頼んだ。ヴァイスとアプダルがすぐに仕事に移ってくれる。

それからタクマは結界の外にもう一枚結界を張った。中を見えないようにするため、不可視の魔法を付与したのだ。

「さて、何が出るか……」

そうして重ねられた結界の中に入っていったタクマは、まっすぐ瘴気の大本へ近づいていく。噴き出す瘴気の中心部にいたのは、人間……であった物だった。

辛うじて人間の形は留めているものの、もはや別の何かだ。豪華な聖職者の服を着ているので、おそらく教皇だろう。

タクマは駄目元で声を掛けてみる。

「聞こえるか？」

「グルルル……」

だが、もう人としての自我は失われてしまっているようだった。男はタクマを見て、涎を垂らしながら唸っている。鑑定しても名前すら出なかった。

彼はアイテムを装着している。それは邪神の欠片だった。

以前会った欠片の装着者は意識を邪神に乗っ取られていたが、今回はそうではない。男は、単なる瘴気を生み出す道具と化していた。

タクマは話すのを諦め、天叢雲剣を構える。

「こうなつては会話すらできない。せめて一瞬で浄化してやるとするか……天叢雲剣。すぐに終わらせてやろう」

天叢雲剣がタクマの言葉に応える。

『分かった。魔力の流し方は前と一緒で構わないが、イメージを変えてくれ。もっと小さく研ぎ澄ますんだ』

タクマは、天叢雲剣に言われた通りにイメージを構築する。

（前に邪神の欠片を浄化した時みたいに炎で燃やす感じでいくか。刀身に炎をまとわせ、触れた瘴気が一瞬で浄化されるイメージ……）

タクマは鯉口を切り、刀身に魔力を流す。すると、鞘と柄の間から真っ白い炎が噴き出した。

「シィ!!」

気合の声と共に、タクマは結界ごと男を斬る。

男は浄化の炎に包まれたかと思うと、自我を取り戻したように言葉を発した。

「ああ……女神よ。闇に堕ちた私を赦したまえ」

男は視線を彷徨わせてタクマを見つけると、彼を見据えて続ける。

「君が浄化してくれたのだな……感謝する。最期に人間として死ぬ事ができる……」

男は、白い炎の中で晴れ晴れとした表情をしていた。しばらくすると男はゆっくりと塵と化して

いった。それと同時に、彼が身に着けていた邪神の欠片も消え去っていく。

タクマは周囲を見渡し、これ以上瘴気が生まれない事を確認した。

「さて、ヴァイスたちはどんな感じかな？ 怪我するような事はないと思うんだけど……」

タクマがヴァイスたちの気配を探ってみると、彼らがかなりの人数を救出した事が分かった。すでにヴァイスたちは、タクマが今いる総本山の中心部から離れるように移動をしていた。

タクマはすぐに彼らのもとに跳んでいく。

「アウン！（あっ！ 父ちゃん！）」

ヴァイスはタクマに走り寄り、アフダルはタクマの肩に舞い降りる。

「ヴァイスとアフダルも大丈夫みたいだな。保護した人々は素直について来ているみたいだし」

タクマがヴァイスとアフダルから紙の札を外して撫でると、一人の老人がタクマに近づいてきた。

「あなたは、この聖獣様たちの主なのじゃろうか？」

「ええ、こいつらに生きている人間を保護して避難させるようにと指示をしたのは俺ですが……あなたは何？」

「僕は教会の元教皇、ニコ・ナードルじゃ。儂らを助けてくれて感謝する。それで、君の仲間はどこにいるのじゃ？」

ニコと名乗ったこの老人は、なんと元教皇だった。ニコは、タクマが一人で総本山の瘴気を除去

したとは思っておらず、周囲を見回していた。

「仲間ならヴァイスたちがいるでしょう？ 俺は基本的にヴァイスたち以外とは行動しないので。

あ、そういえば名乗っていませんでしたね。俺はタクマ・サトウ。Sランクの冒険者です」

タクマが冒険者カードを提示すると、ニコは目をカッと見開いた。

「おお、Sランクの冒険者はここまでの力を持つのか……たった一人でこの地を浄化しただけでなく、聖獣をも使役するとは」

タクマは、気になった事を聞いてみる。

「ところで、なぜヴァイスたちが聖獣であると知っているのですか？」

今まで初見でヴァイスたちが聖獣だと気付いた者はいなかった。ニコはタクマの警戒を解くように笑みを浮かべて答える。

「大丈夫じゃよ。言いふらす気はない。彼らが聖獣だと分かったのは、儂が『鑑定（大）』のスキルを持っているからじゃ。儂の鑑定で見られないのは神に連なりし者だけじゃからな」

続けてニコは、自分が教皇になれたのはそのスキルがあったからこそだと説明を加える。タクマは納得しつつ、ニコに釘を刺しておく。

「なるほど。とりあえず、ヴァイスたちの事は内密にしておいてください。バレルと面倒そうなので」

「あい分かった。ところで、儂らをどうやって救助するつもりなのじゃ？ 乗り物もないようじゃ

し。自力でここから人里まで移動するのは、人数も多いし厳しかろう？」
「まあ、その辺は後で話します。とりあえず皆さんを休ませましょう」
人々は今まで重圧の中で生き抜いてきた事で、かなり消耗しょうもうしているように見えた。タクマはひとまず、休息の準備を整えてあげる事にしたのだった。

「じゃあ、これとこれ、それとそっちに出してある物も、みんなで分けて食べてくれ」
彼はアイテムボックスから次々と食べ物を出していった。

今まで多めに買っておいた物が役立つ時が来た。サンドイッチ、串焼き、屋台料理などを出していく。この前作ったスープも出してあげた。

そんな中、タクマをジッと見ている者がいた。ニコである。彼はタクマから視線を外す事なくずっと注視している。

(マスター。ニコがマスターを鑑定しているようです)

ナジが報告してくれたが、タクマも気付いていた。タクマは食べ物を出し終わると、ニコの眼前に跳ぶ。

「ニコさん。勝手に鑑定するのはいけませんね」

ニコは気付かれないと思っていたらしくひどく驚いていたが、タクマは毅然きげんとして続ける。

「俺も鑑定スキルを持っているので、やられたら気付きますよ。まあ、あなたの鑑定能力では、

俺のスキルは見られないでしょうけど」

「す、すまんの。だが……あなたは、神の代行者なのじゃろうか？」

ニコは自分の鑑定能力に絶対の自信を持っていたが、タクマのスキルはおろか、名前、種族、年齢すら見られなかった。ニコの鑑定で見られないのは、神に連なりし者のみ。それゆえ彼は、タクマの事を神の代行者だと考えたのだ。

タクマはため息をつきながら告げる。

「良いですか？ 私は神の関係者ではありません。たまたま総本山に用があつた冒険者です。言っている意味は分かりますね」

タクマは本意ではないが、ニコを少しだけ威圧いあつする事にした。はつきりと言葉にこそしなかったが、自由な身でいたいから放っておいてほしいとアピールしたのだ。

「わ、分かったのじゃ……もう詮索しない」

タクマの威圧は凄まじいものだったが、それでもニコにはその底が見えなかった。

タクマはニコが約束をしてくれたところで、威圧するのをやめた。その途端、ニコの体中から汗が噴き出す。

タクマは気を取り直すように、優しい表情に戻って告げる。

「分かってくれて何よりです。では、食事にしましょう。みんな待っていますから」

食べ物はすでに配り終えられ、すぐにでも食べられる状態になっていた。

タクマはニコにも座るように促して、全員にクリアと回復魔法を掛ける。人々は自分たちの体がきれいになり体力が戻るのを感じた。

ニコは、待つていた人たちに声を掛ける。

「皆、待たせてすまんの。食事を提供してくれたタクマさんに感謝するのじゃ。そして、我らを瘴気から守ってくださったヴェルド神様に祈りを捧げるのじゃぞ」

彼ら皆、ヴェルドの敬虔な信者である。人々は胸の前で手を合わせ、真剣に祈りを捧げた。

「それでは、ただこうかの」

「……いただきます」

かなり空腹だったらしく、彼らは出された食事を夢中で食べた。タクマはそんな様子を見ながら、ニコの隣に座って話しかける。

「食べながら聞いてください。ニコさんたちはこの地を離れるという事で良いのでしょうか？ でしたら、俺が懇意にしているトーランの領主様に受け入れを要請してみますが」

タクマがこう尋ねたのは、ニコたちの意思を確認したかったためだ。

ニコたちには一時的に静養するとしても、この土地を復興していくという選択肢もある。その一方で、タクマが提案したように、トーランに移住する事もできるのだ。

ニコは考え込み、ゆつくりと口を開く。

「……んぐ。そうじゃのう。儂らはいずれ総本山の復興をせねばならん。だが、ここは一度汚され

た土地。この地で教会を再興するのはあまり良くないじゃろう」

「へえ、なぜですか？ 確かに瘴気で汚されたのは事実ですが、しっかりと浄化しました。瘴気の本も排除しましたし」

しかしニコによると、一度でも汚されてしまった土地は、浄化されたとしても神の声が聞きづらくなってしまふという。

「なので、タクマさんのお誘いを受けて移住しようと思うのじゃ。トーランであれば霊山が近くにある。教会の本拠地として復興もやりやすいじゃろうて」

ニコは、そこまで考えていたようだ。

だがそこで、タクマは心配になった。本部がトーランにできてしまうと、トーランの教会と孤児院に何らかの影響が出てしまう気がしたのだ。

その懸念を伝えると、ニコは理解してくれたようだった。

「ふむ……トーランの教会はタクマさんが関わっていると……分かったのじゃ。トーランの教会には迷惑を掛けないようにしよう」

ニコはあっさりとタクマの希望を呑んでくれ、さらに続ける。

「なあに、タクマさんの庇護があれば、トーランの教会は安全じゃろうて」

「ありがとうございます。トーランの教会は俺にとつて色々と思入れがあって、あのままであつてほしかったんです。その代わりといつてはなんです、パミル王と早く話せるように紹介させて

いただきますね」

タクマはそう言つてニコに笑いかけた。

その後、食事を終えたニコたちに、タクマは彼らの移送の仕方について話した。すでに簡単には話してあったのだが、改めてしっかりと説明していく。

「ふむ。要はその方法を知ってしまうと、儂らの身にも危険が及ぶという事かの？」

「そうです。他国に知られれば、どんな手を使つてでも手に入れたと思うような方法とも言えるんです。あなたたちに危険が及ぶのを避けるためですが、それと同時にあなたたちが知った事で、私の家族にまで危険が広がってしまうのを避けるというのがあります」

人々は移動時に眠らされる事を了承してくれ、さらにニコたちの方から、秘密を厳守するために契約を交わしたいと言つてきた。

「秘密にするのならそこまでした方が良いじゃろ？ 人は弱い。何かのきっかけで話してしまう事はあるじゃろう。だからこそ、契約で縛つて緊張感を持たせねばな」

ニコはそう言つて、全員に契約を交わす事を約束させた。

「皆、問題なく契約を交わすとの事じゃ。これで、秘密を守ろうと心に刻むじゃろう」

「ありがとうございます。それなら安心して移送ができます」

タクマは元々、移送を終わらせてから契約の話を持ちかけるつもりだった。ニコが説得をしてく

れた事で手間が省けた。

タクマは皆に告げる。

「では、夜にならないうちに移動しましょう。全員一か所に集まってください」

タクマは人々を集めると、すぐに睡眠の魔法を行使した。そして、全員を範囲指定し、あつという間にトールランへ跳んだ。

トールランの領主邸に着くと、コラルの使用人たちは屋敷の目の前で待機していた。使用人たちはタクマたちを見て速やかに行動を開始する。

「屋敷の中にお連れしろ！ 眠っているからといって乱暴に扱うんじゃないぞ」

使用人たちは細心の注意を払つてニコたちを運び入れていく。

タクマはコラルに話しかける。

「コラル様、とりあえずこれで全員です。あそこで一緒に運ばれている老人ですが、元教皇のニコ・ナードル様です。鑑定で本人だと確認しました」

「何だと？ 元教皇だと？」

続けてタクマは、ニコたちがトールランへ移住を希望している事、また教会の総本山をこの地に作りたいと考えているという事を伝えた。ただし、トールランの教会には不可侵を約束してくれたとも説明する。

「まさか、元教皇を助けるとはな。しかし、教会の復興をするとすると、王に話を通さねば決められんが……ああ、だから私に話したのか？」

「ええ。ニコさんに、パミル王にアポイントを取ってやると約束したんですが、私よりコラル様の方が早いでしょうから」

タクマは手早く手続きを進めるために、あえてコラルに言ったのだ。タクマが直接頼んでも大丈夫だろうが、コラルを介した方が早い。

「分かった。そちらはしつかりとやっておこう。ところで、先に連れてきている四人と次に来た二十人とは契約を交わしておいたぞ。助けた者の名前を秘匿ひとくするという内容でな」

コラルは契約を済ませてくれていたようだ。さらに、今回連れてきた人々にも同じような契約を進めてくれるという。

「ありがとうございます」

「それで、総本山の浄化は済んだのか？」

「ええ。ただし、少しやる事がありますので、もう一度戻ります」

「どういう事だ？ やる事は終わったのだろう。あちらに用事はないと思うのだが……」

「ちよつと野暮用やぼもちようがあります」

言い淀むタクマを見て、コラルは何かを察した。そうして彼は、それ以上聞かないでいてくれた。あまり深く聞いて、タクマの持ち込む厄介事やっかごとに巻き込まれるのを避けるためである。

タクマは笑みを浮かべて言う。

「さすがに分かっていますね。あまり聞かない方が良いかもしれません」

「タクマ殿とも付き合いが長くなってきたからな。まあ、心配ないとは思いますが、一応気を付けてな」

「ありがとうございます。また近いうちに伺いますので、その時にまた話しましょう」

タクマはそう言うつてその場を辞すと、ヴァイスとアフダルが待つテントへ跳んだ。

「アウン（おかえりー）」

「ピュイ（おかえりなさいませ）」

「ただいま。異常は……ないみたいだな」

ヴァイスとアフダルが元氣そうな事に安心したタクマは、残っていた用事に取りかかる事にした。タクマはヴァイスたちに、夕夏がいたダンジョンに戻ると伝える。

「アウン？（中に戻るの？ また大変な事する？）」

「そういう事にはならないよ。ただ、ヴェルド様が言っていた物を確認しないといけないんだ。それ以外に、ダンジョンコアにも戻ってくるように言われてたし」

ヴェルドからはダンジョンの奥の部屋へ行くように言われていたが、タクマはそれを後回しにしていた。

アフダルが心配そうにして話しかけてくる。

「ピユイ（ですが、あの光の玉が害を及ぼしてこないとも限りません）」

「確かにな。だが、すでに試練をクリアしているんだから、きつと大丈夫だと思うんだ」
こうしてタクマたちは、ダンジョンへ戻る決意をするのだった。

2 夕夏、回復する

さつそくダンジョンの最深部に跳んできたタクマたちの前に、光の玉が現れる。

『来たか……』

「待たせたな。ちょっと遅くなった」

タクマがそう言つて謝ると、光の玉は点滅しながら反応する。タクマはさらに続ける。

「で？ 俺を待っている物があるつて言つたな？」

夕夏を救い出す前、光の玉はそうのように言っていたのだ。

『うむ。だが、その前にこれを受け取るがいい。お前たちが初めてここへ来たタイミングで、とある存在がこのダンジョンに干渉し、お前たちへプレゼントを残したのだ』

タクマの目の前に、三つの宝箱が現れる。

促されるままに宝箱の一つを開けると、その中にはタクマにとって見慣れた物が入っていた。

「タブレット？ これがプレゼント？ さつき干渉してきたと言つていたが」

『そうだ。お前がここに来るのを分かつたうえで現れたのだろうと考えている。コアを壊さずにダンジョンに干渉できる者などこの世界にはいない……ただ一つの存在を除いてはな』

光の玉の話を聞いて、タクマはその存在の正体が何となく分かった。

タクマはぼそりと呟く。

「ヴェルド様か……」

タクマの答えを聞いた光の玉は肯定すると、続けて『鑑定してみてもどうだ？』と促してきた。そこへナビが現れて同調を示す。

「おそらくヴェルド様は何かしら細工さいくをしているのではないのでしょうか？ その機器は、異世界商店で手に入れられる物です。そんな物をわざわざタクマさんに渡すとは考えにくいです。鑑定を勧めます」

「確かにそうだな。だが、これを鑑定するのは後にしよう。今はこいつと話した方が良いと思うんだ」

そう言つてタクマは光の玉の方に視線を向ける。

『ん？ 確認は良いのか？』

「ああ。それはお前との話が終わつてからにする」

タクマが光の玉との会話を優先するのには理由があった。以前、光の玉と話した時、光の玉はタクマを日本人と言い、彼の事をヴェルドミールの間人ではないと見抜いていたのだ。

タクマがその事が気になっていたらと伝えると、光の玉はあっさり教えてくれた。

『それは簡単だ。お前たちの前にも日本人と話した事があるからだ』

「話した事がある？ それはどういう？」

タクマが首を傾げていると、光の玉は続ける。

『その人物については、お前の記憶にもあるはずだ。このダンジョンの創造主である瀬川雄太の遺言を受け取った者よ』

「創造主!? ここは瀬川雄太の造ったダンジョンなのか？」

日本からの転移者であり、タクマに遺言を授けた瀬川雄太は、ダンジョンを巡れと書き残していた。つまりそれは、彼の造ったダンジョンを訪れるという事だったのかもしれない。

そう考えつつもタクマは、そもそも人の身でダンジョンを造る事など可能なのだろうかと思いを抱いていた。

『それより、お前にお願ひしたい事がある』

光の玉はタクマの思考を遮るように告げた。光の玉はその頼み事のために、タクマに戻ってくるように言ったという。

『こちらへ来るのだ』

タクマの返事を待たずに、光の玉が移動を始める。

最奥の部屋の壁にやってくる、光の玉は自らを点滅させた。すると壁だったはずの場所に大きな扉が現れる。

『私の頼みの前にこれらを渡そう。試練をクリアしたお前は、これらを受け取る資格がある』

光の玉に促されるままに扉を開くと、そこにはたくさんさんの宝箱と共に、冊子になった書類が山になっていた。

「これは？」

『遺産だ。瀬川雄太の研究の成果を記した冊子と、彼が作った魔道具だ』

瀬川雄太の遺産は膨大な量だった。大きな物から小さな物まで様々ある。宝箱で百個、冊子は百冊以上あった。

「すごい量だ。これだけでもかなりの価値になるだろうな」

タクマの呟きに、ナビが反応する。

「おそらく長い間、このダンジョンは誰にも見つかる事がなかったでしょう。人の出入りがあるダンジョンではこうはいかないでしょうし」

ダンジョンの最奥に到達できる者はそう多くない。なぜなら、それまでに戦うであろうモンスターが相当な強さなのだから。

光の玉が淡々と告げる。

『お前に渡す物はこれですべてだ。では、最後に私の頼みを聞いてくれ——このダンジョンを終わらせてほしいのだ』

タクマに遺産を渡した事で、ダンジョンの役目は終わったという。そもそもこのダンジョンはその役割のためだけに造られ、破壊される事をずっと望んできたのだ。

『すべての遺産を回収すると、部屋の奥にダンジョンを司る魔石まがしが見つかるだろう。それを破壊して脱出してくればいい。これようやく役目を終える事ができる』

光の玉はそう言い残すと、ゆっくりと消えていく。

タクマはその光景をじっと見つめていた。

「分かった。お前の頼みはしっかりと聞いた。俺の手で破壊するよ」

タクマはすべての遺産をアイテムボックスに回収した。ヴェルドがくれた宝箱はまるごと収納しておいた。

そして遺産がなくなった部屋の奥にある黒い祭壇さいだんの上に、大きな赤い石を見つける。

「これだな……」

タクマは赤い石に手をかざし、魔力を放出していく。

赤い石はカタカタと震えだし、やがてタクマの魔力に耐え切れずに罅ひびが入っていく。そして、ガラスが割れるような音と共に砕け散った。

その瞬間、ダンジョンが大きく揺れた。天井が少しずつ崩れ始めていく。

「……みんな、脱出しよう」

タクマはそう宣言し、空間跳躍でダンジョンを後にした。

テントに戻ったタクマは、テーブルセットにドカッと座る。

最愛の女性である夕夏が眠っていたダンジョンが同郷の者が造った物だった。タクマはその事に奇妙な縁を感じ、タバコに火を点けて一息つく。

「……ふー。とりあえずヴェルド様の贈ってくれた物を確認しておこう。まずはタブレットから見ていくか」

アイテムボックスからタブレットを取り出し、鑑定を行なう。

『使用者限定タブレット（神器）』

・タクマ・サトウのスキル「異世界商店」を、登録した人間が使用できるタブレット。

・所有者のタクマ・サトウ以外に使用できるのは、彼と同郷の者と子供のみ。

・買える物に制限あり。

注：買えるのは、衣食住に関係する物と、生産に必要な機械、素材のみ（ただし、現代武器の作製は不可能）。

- ・タクマ・サトウの魔力でしか購入できない。
- ・貯めておける魔力量は1000万（それ以上の買い物はできない）。
- ・タクマ・サトウが住んでいる拠点のみで使用可（住宅との同期は必須）。
- ・一度同期すると、持ち出しは不可能（持ち出しても家の中へ戻ってしまふ）。

「おいおい……随分とサービス満点だな。俺以外でも異世界商店を使えるようにする神器か」
タクマの呟きにナビが答える。

「これでマスターが不在の時にも、家族が使用できる事ができるようになりましたね」

「そうだな。制限はあるが、色々と使えそうだ」

確認が終わったタブレットをアイテムボックスに戻すと、続いてタクマは小さい箱を二つ取り出す。

両方の箱を開けると、指輪が一组と、深紅しんくの液体が入っていた。

「なんだこれ？」

まずは指輪の方を鑑定してみる。

『祝福のエンゲージリング（神器）』

・ヴェルド神が直々に祝福を付与した婚約指輪。

- ・二人の仲がさらに良くなってほしいという、祈りが捧げられている。
- ・念話が可能となる。
- ・離れていてもお互いの存在を感じる事ができる。
- ・装着した者は運が良くなる。

「へえ、婚約指輪か……迷惑を掛けた俺たちに対する、ヴェルド様からのお詫わびのつもりなんだろうけど」

指輪を鑑定し終わると、次は深紅の液体だ。

見た事もない物なので少し不安になるが、鑑定してみないと分からないので、タクマは恐る恐る確認してみる。

液体はとんでもない代物だった。

「マジか……なんつう物をよこすんだ、あの女神様は……」

タクマは手に持っている深紅の液体を鑑定したのだが……

『ティアーズ・エリクサー（神薬）』

- ・世界にただ一つしかない。
- ・ヴェルド神の涙を使用して作った最高の薬。

- ・摂取者が持つ、すべての体の異常、病気、体の欠損^{けつそん}を治癒する。
 - ・摂取者が持つ、すべてのステータス異常、呪い^{のろ}の類^{たぐい}も無効化する。
- 注意：薬効がかなり強いため、寿命が延びるつえに不老になる。

「あいつを治してあげたかったから嬉しいのは確かだが……注意の項目に書いてある副作用がヤバいな」

タクマはエリクサーを箱へしまおうとしたのだが、箱に違和感がある事に気が付いた。アイテムを包んでいるクッションが厚すぎるのだ。

クッションを箱から取り外すと、そこには折りたたまれた紙が入っていた。

タクマさんへ

この箱に入っているのは、あなたとユウカさんを祝うために用意した物です。指輪は、もちろんマリッジリングですね。二人の仲がずっと良くなるように祈りを捧げています。

そして、エリクサーに関しては言わなくても分かりますよね？ 彼女はあなたの子を欲しがっていますから、そのために必要だと思い、用意させていただきました。

この薬であれば、彼女が失ってしまった子宮や卵巣を取り戻す事ができるはずですよ。副作用はかなり過激なものとなっていますが、タクマさんの伴侶になるのであれば、ちょうど良いのではない

でしょうか？

エリクサーを使うのも使わないのも、あなたたちにお任せします。あなたたちが良いように使ってくださいね。

ヴェルド

わざわざタクマたちを祝うために、アイテムを用意してくれたようだ。

「ヴェルド様。ありがとうございます。この薬は夕夏としっかりと話してから、使わせていただきます」

タクマはクッションを箱に戻し、エリクサーと指輪をしまった。

続いて他の宝箱を調べていったが、どれもタクマが見た事のない代物ばかりだった。

「これはそのうちしっかりと鑑定しよう。さすがに疲れて集中できない。みんな、今日はもう遅いし、明日の朝戻ろう」

出した宝箱をすべてしまったタクマは、帰宅を明日にするとヴァイスたちに言う。

ヴァイスたちも了承してくれたので、食事にする事にした。作るのは面倒だったから、異世界商店で買ってしまおう。

「ヴァイスとアフダルは何がいい？」

「アウン！（肉の載ったご飯！）」

「ビュイ（ヴァイスと同じ物で）」

どちらも牛丼が良いと言うので、少し奮発して高級牛丼を食べる事にした。

「魔力量」：8

「カート内」

・最高級牛丼（和牛使用）メガ盛	× 3	.. 9000
「合計」		.. 9000

決済を行ない、牛丼をヴァイスたちの前に置いてやる。彼らはすぐに、とても美味そうに食べ始めた。

（うま！ お肉とおつゆがご飯に絡んで最高！）

（それに、肉のうまみがつゆにしみ出して、とてもマッチしてます！）

ヴァイスたちは食べながらしゃべるのは行儀が悪いと理解しているので、タクマに念話で感想を言ってきた。

「そうか、気に入ってくれて良かったよ。うん、高かっただけあって、肉も出汁も最高な牛丼だ」
タクマたちはあつという間に食事を終えて、早めに休む事になった。ここまであまり休憩を取っていないかったので、みんなすぐに深い眠りに就く。



翌朝。しっかりと睡眠を取り、疲れも取れたタクマたちは自分たちの家へ跳ぶ。

早かった事もあり、ほとんどの家族はまだ寝ていた。

タクマは自宅に入り、応接室のソファに座ると、執事のアークスがやって来る。彼はコーヒーを出しながら聞いてくる。

「おかえりなさいませ。やる事は終わりですか？」

「ああ、問題なく終わった。それで、夕夏の様子はどうか？」

「全く問題はありません。まだ体を自由に動かす事はできませんが、少しずつ回復しているようです。皆との顔合わせもしましたが、明るい性格の方なのですぐに馴染んでおりました」

元々夕夏はとても社交的だったので、そういう心配はしていなかったが、そこまであつさりと仲良くなれるとは思っていなかった。

「へえ、多少苦勞するかと思っただがな。まあ、みんなが受け入れてくれたのなら良かった」

「子供たちにはとても懐かれていますね。子供たちも初めはちょっと警戒していたようですが、タクマ様の話を始めるとすぐに仲良くなりました」

「何を話したかは気になるが……まあ、仲良くなったなら良いか」

タクマとアークスが留守中の様子を話していると、後ろから聞き慣れた子供たちの声が響く。

「あー！ おとーさんだー！！」

「おかえりー！！」

「おかえりなさい」

「あ、おかーさんよんでくるー！！」

「私もー！！」

「僕もー！！」

寝起きにもかかわらず元気な子供たちは、夕夏を呼びにバタバタとタクマの部屋に走っていつてしまった。

「もう、お母さんと呼んでるのか。相変わらず子供と仲良くなるのが早いんだな……」

タクマはかましい子供たちの行動を、笑いながら見送るのだった。

3 二人の将来

「おかえりなさい。無事に戻ったみたいで安心したわ」

車椅子に座る夕夏は、子供たちに押されながらタクマのもとへやって来た。

「ああ、ただいま。体調はどうだ？」

「そうね。まだ歩けないけど、体調自体は問題ないわ」

子供たちが丁寧に看病をしてくれたらしく、夕夏は幸せそうな顔をしていた。

「あのね、おかーさん、元気になってきたよ」

「ご飯も食べられるし、起きられるの」

「それとね、僕たちとお話ししてくれる」

「おとーさんの事、いっぱい教えてくれたの」

子供たちはタクマの留守中に、夕夏がどんな様子だったかを懸命に説明する。タクマはそれを聞きながら、子供たちを撫でる。

「なるほどな。みんな頑張って夕夏を世話してくれたんだな。ありがとう」

タクマに褒められた子供たちは、嬉しそうに目を細めた。すると、夕夏は口を尖らせて不満を口にする。

「やっぱりタクマが一番なのね。あなたが帰ってきた途端に、花が咲いたように明るくなるんだもの」

子供たちは気が付いていないようだが、タクマが留守になると少しだけ表情が暗いのだそうだ。

それが、タクマが帰ってきたと分かると、全く違う表情を見せたいらしい。

「まあ、そんな事でやきもちを焼くなよ。子供たちとの付き合いは、俺の方が長いんだ。どうし

たつてそうなる。これからお前がたくさん話していけば問題ないだろ？」

「それはそうなんだけど……それでも悔しいのは変わらないわ」

夕夏は子供のようにそっぽを向いてしまった。

「おかーさん、どうしたの？」

「おこってる？」

「僕たち駄目な事しちゃった？」

子供たちは不安そうな面持ちで夕夏を見る。夕夏は慌ててそれを否定した。

「違うわ。私はただ、あなたたちとタクマがすごく仲が良くて羨ましかっただけ。私もそうなりた
いなーって」

夕夏は子供たちをなだめようと、思った事を説明していく。

「えー？ 僕たちおかーさんも好きだよー」

「僕もー」

「私もー」

「もっとお話して仲良くなるー」

「おかーさんやきもち？」

「そうね。これからいっぱいお話しして仲良くなりましょ。それよりも、ご飯の時間みたいだから座りましょね」

「[[[はー]]]]」

子供たちが席に着くと、アークスと使用人たちが朝食を持って現れた。そして、子供たちの前に食事を置き、食べるように促す。

もちろん全員で朝食を食べた。子供たちは普段からかなりの運動量をこなしているため、朝からたくさん食べる。タクマはそれを微笑ましく見ながら、自分も食事を進めていった。

食事を終えると、子供たちは庭に出てヴァイスたちと遊び始める。それを見送ったタクマは夕夏に話しかけた。

「夕夏、ちよつと場所を変えて話さないか？ 将来について重要な事なんだ」

タクマは言葉を選んで口に出す。夕夏の方もタクマの真剣な顔を見て、居住まいを正した。タクマが真剣な顔の時は、本当に重要な話だと理解しているのだ。

「分かったわ。どこで話す？」

タクマは二人きりで話しかかったので、誰も来ないであろう寝室で話をする事にした。

そして一応、アークスたちには部屋には近づかないように言ってから、夕夏の車椅子を押して寝室に移動する。

「で？ どんな話なの？」

夕夏が早く話すよう促す。だが、タクマはそれを制して、部屋に遮音の魔法を施した。

「これで、話が漏れる事はない。じゃあ、大事な話だからゆっくりと話そう」

そう言っただクマは、夕夏が封印されていたダンジョンの話始めた。

そして、そこで手に入れたアイテムについて話していくと、夕夏表情が見るうちに変わっていった。

「色々言いたい事はあるけど……私の体が治る？ でも……私の病気は相当昔に手術してるし、タクマの回復魔法でも治らなかつたわ」

「ああ……お前がそう言うのなら、治ってなかつたんだろうな。だが、これがあればお前は完全な健康体へ戻る事が可能なんだ」

タクマはそう言っただ夕夏を見る。しかし、タクマの表情は優れなかつた。というのも、このエリクサーを飲めば、通常の人間のあり方から逸脱してしまうのだ。

タクマは効能と共に、副作用も正確に伝えていく。

「そう……寿命が……でも、それくらい強い薬じゃなきゃ、治らなかつて事なのね」

「ああ。ただな、お前を一人にする事はないから安心してくれ」

タクマは夕夏を安心させるため、今まで秘密にしていた自分の種族や寿命に関して、正直に話した。

「……というわけで俺は、寿命が延びたお前を置いてさっさと死ぬよう事はない」

「あなたがすでに神様になりかけていたとは……驚きだわ。でもそれだったら、私は迷わないわ。

あなたの子供を授かれて、寄り添って長い時を過ごせるならむしろ飲みたいくらいだし。何より、私はあなたとずっと一緒にいたい」

夕夏はタクマの状況を聞き、すぐに決心がついた。タクマが種族的に長い寿命であるならば、自分がそうなつたとしても構わないと。

タクマは腹の据わつた夕夏を見て、自分の覚悟も決まった。

「分かつた。俺だつてお前とはずっと一緒に過ごしたいんだ。だけど、俺のエゴでこれを飲ませたくなかつた。ずっと一緒にいたいと言っただくれてありがとう」

タクマは覚悟を決めた夕夏を抱きしめる。

「大丈夫よ。私はあなたが傍にいてくれれば、どんな事でも乗り越えてみせる。だから、私にあなたの子供を授けてちょうだい」

タクマはこの話の後にしつかりとした求婚をしようと考えていたのだが、まさか夕夏の方から先に言われてしまった。

「ふう……逆プロポーズされるとは。後で俺の方から言おうとしてたんだが」

タクマがため息をつきながら苦笑いしていると、夕夏が意外そうな顔を見せる。

「あら。あなたからのプロポーズはもうしてもらつてるじゃない。私の言葉はプロポーズを受けたうえで自分の覚悟を言ったに過ぎないわ。まあ、それがプロポーズと言われたらそうかもしれないけど。でも、女がプロポーズをしたっていいじゃない？」

夕夏はそう言っただけで笑う。そして、タクマに向かって例のエリクサーを出すように促した。タクマはアイテムボックスから、深紅のティアーズ・エリクサーを取り出す。

「今すぐ試すのか？ 別に後でも構わないぞ？ 飲んだ後にどうなるか分からないんだから」

「もう！ 決めたんだから揺らぐような事言わないで！ それにここなら倒れたとしてもベッドがあるんだから大丈夫でしょ。ほら、薬はテーブルに置いて、私をベッドに乗せてちょうだい」

タクマは夕夏の決心が揺るがないと分かり、彼女の体を抱き上げてベッドに降ろす。

「ふふ……このベッドはタクマの匂いに包まれるから好きだわ。それに子供たちの匂いも……」

「しっかりと洗濯してもらってるから、匂いは大丈夫だと思っただけ……」

「もう！ そういう事を言ってるんじゃないの。相変わらず鈍いんだから……まあ、そこも良いんだけどね」

最後の言葉はタクマには届かなかったが、夕夏は恥ずかしそうにしながらも、エリクサーを持つてくるように言う。

タクマはエリクサーをテーブルから持つてきて、夕夏に差し出した。

「これを飲めば、あの子たちに兄妹を作ってあげられる。何よりあなたに……ね」

夕夏は優しく穏やかな笑みを浮かべて薬瓶を開封し、一気にエリクサーを啣^{あお}った。そしてベッドに横たわって結果を待とうとしたのだが……

「あ、起きたまま結果が……出るものじゃない……の……ね……」

最後に何かを言おうとしていたものの、それを聞き取る事はできなかった。

タクマは、深い眠りに入った夕夏を起きるまで待つ事にした。子供たちの声が聞こえやすいように遮音をやめ、部屋に備え付けてある大きな窓を開け放つ。子供たちの声が聞こえ、タクマの好きな湖畔^{こほら}の景色が見える。

夕夏の方に目を向けると、すでに異変が起きていた。夕夏の体が淡く発光しているのだ。

「これは、エリクサーの影響か？」

夕夏の体全体が光っているのだが、特に一部が強く発光していた。

それは夕夏の下腹部だった。きつとこの光が夕夏の体の悪い所を治しつつ、体を作り変えているのだろう。

その様子をベッドの横で見ていると、風と共に、湖畔の精霊であるアルテが現れた。

「あらタクマ。あなたの奥さん、どうしたの？ 光っているけど……あれ？ この光……」

「ん？ 知ってるのか？」

「ええ……エリクサーね。ただ、私が見たエリクサーよりも光が強いけど」

どうやらアルテは過去にエリクサーを服用している様子を見た事があったらしいのだが、その時の様子とは明らかに発光量が違うようだ。

「まあ、エリクサーといっても、夕夏が飲んだのは、ティアーズ・エリクサーだからな」

「ああ、なるほど。ティアーズ・エリクサーね……はあ？ ティアーズ・エリクサーですって!？」

「ああ、ヴェルド様からの贈り物だからな」

「名前は聞いた事があったけど、そんな物持つてるなんて……あなたといると飽きないわね。色んな事が規格外だわ」

アルテは心底驚いた顔をしているが、呆れているというよりは非常識さを楽しんでいるようだった。

「アルテ、夕夏がどのくらいで目が覚めるか分かるか？」

「私が見た事があるのは、ただのエリクサーよ。その時は朝に飲んで、起きたのは昼過ぎだったかしら。ただ、これは神の薬。もっと早く目が覚めると思うわ」

アルテはそう言っ外へ飛んでいった。

タクマは夕夏が気持ち良く起きられるように、PCを取り出し彼女の好きなジャズを流しておく。そしてベッド横で夕夏の手を握って、起きるのを待った。

三時間後。夕夏の発光もほとんどなくなり、体を動かせるようになっていた。

「う……うん……ここは……タクマの家……」

「ああ、目が覚めたな。どうだ、体の調子は？」

「え？ そうね、すごく調子はいいわ。あつちで病気になってからは、ずっと不調だったのだけど、今はすごく体が軽くて、いつも感じていた怠さだも嘘のようになくなっているわ」

一生付き合っていかなければならないと思っていた体の不調が解消されていた。夕夏は、まるで自分の体が入れ替わったような感覚に陥っている。

「夕夏は鑑定が使えるんだろ？ とりあえず、自分の体がどう変化したのか把握した方が良い。俺みたいに鑑定をサボっていると、いつの間にか種族が変わってたりするかもしれない」

タクマは自虐じぎゃくを交えながら定期的に鑑定を行なうように勧めた。そう言いながらも、自分はあまり鑑定を行なう気はないのだが……

「そうね。ちよっと待って、嘘……」

タクマの予想通り、鑑定結果に異変があったようだ。

「覚悟はしていたのだけど……私、人間を辞めちゃったみたい」

夕夏は、錆びたロボットのようにギギギと顔をタクマの方へ向ける。

「やっぱりか。で？ どんな種族になったんだ？」

タクマは夕夏を落ち着かせるように頭を撫でながら聞く。夕夏はショックが大きかったらしく、言葉を発する事ができずにいた。

「大丈夫だ。種族が変わったところで生活は変わらない。実際にそうなった俺が言うんだから間違いない」

「う、うん。それはタクマを見ていれば分かるんだけど……やっぱり種族が変わったと知らされるとショックが大きいわ」

自身の時だって、大変なシヨックを受けたのだ。夕夏がそう思うのも無理はない。「すまんが、鑑定をしても良いか？ どっちにしろ、夕夏の状況を確認しないといけないから」「ええ……そうしてもらえるとありがたいわ。ちよつと話す余裕はないの」顔色の悪い夕夏を寝かせ、タクマは夕夏を鑑定する。

〔名前〕	…ユウカ・シバ
〔種族〕	…女神（仮）
〔年齢〕	…36
〔魔力〕	…1億5000万
〔スキル〕	…鑑定（大）、素敵（大）、危険察知（大）、隠密（極）、タイム（極）、意思疎通（極）、身体強化（中）、病氣無効、毒無効、精神魔法無効、未来予測（極）、封印魔法（極）
〔称号〕	…半戦神の伴侶、女神（仮）

（へえ……いきなり女神になつてる。（仮）と付いているという事は、完全な神ではないのか）タクマからすれば、夕夏は能力的にはそこまで飛び抜けているというわけではないが、それでも人からは逸脱していると言えた。

「夕夏。とりあえず鑑定はした。ただ、お前の元のスキルとかを知らないから何とも言いにくいんだ」

「そうね……私が元々持っていたスキルはとも少なかったわ」

夕夏は少しずつ立ち直っているようで、元々のスキルについて話してくれた。

封印前のスキルはとも少なく、鑑定（中）、隠密（極）、タイム（極）、意思疎通（極）、未来予測（大）、封印魔法（極）は元々持っていたそうだ。今回の事で、各スキルが強化されたうえで、新たなスキルが追加されているようだった。

「ねえ、タクマ。このスキルの増え方は大丈夫なの？」

「大丈夫だ。俺やヴァイスたちよりもまともだと思う。ただ、種族は女神（仮）になっていたな」「女神（仮）？ 私が見た時は（仮）なんてなかったわ。だから、てっきり女神になって死ななくなつたのかと……」

どうやら夕夏の持つ鑑定（大）というのは（極）に比べて精度が甘いようだ。そのせいで勘違いしたのでらう。

「おそらく、鑑定のスキルレベルによって見え方が違うんだ。俺の鑑定は（極）だから、お前よりも細かく見えているんだと思う」

「本当？ 私、永遠に生き続けなければならぬのかって……」

「ならないと思う。たぶん（仮）となっているから寿命はある。おそらく俺と同じくらいの寿命に